

青丘文庫研究会 月報

No.234

2009年7月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp

①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)

②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円

※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000 円/年をお願いします。

<巻頭エッセー>

在日二世から見た在日一世の習俗の一端 —大川端の「竜王宮」にまつわる記憶の断片— 玄 善允



「在日」一世が創り上げた世界が次々に姿を消しつつある。その一つとして、大阪の大川河川敷の「クッ」の名所であった「竜王宮」も不法占拠を理由に立ち退きを要求されているとの報を耳にするや、それにまつわる思い出が次々と浮かび上がってきた。

僕の両親は 1940 年頃に済州島から大阪にやってきて、そのまま大阪で半世紀以上を生き続けた。父は 10 年ほど前に亡くなり、今は生前の彼の希望に沿って済州島で永遠の眠りについているが、他方、残された母は相変わらず大阪でひっそりと一人暮らし。父を納骨した頃には、同じ墓に入ると言っていたのに、今や「死んだらあんたらの近くに埋めてくれ」と繰り返し訴えている。

彼らにとって異郷の地で生き延びる資産としては、体力と気力、そして在日済州島人のネットワーク（経済的相互扶助に加えて、伝統的習俗による歴史的連続性と共同性による精神的な慰み）以外に何物もなく、当然のごとくそれに依拠して暮らしていた。ところが、二世である僕らにとっては、彼らと身を寄せ合って生きてきたから、当然、その生活感覚を愛おしく思いつつも、その一方で、彼らが遵守する祭祀・習俗の多くが「日本的なもの」と比べて劣性を刻印されているように思えて、負担であるばかりか嫌悪感を抱いたりもした。また、両親がそんな僕らに自分の過去や生き方を説明したり押し付けたりすることなどなく、「お前らは自分の人生を勝手に生きろ」といった自由放任の姿勢を堅持したせいもあって、その習俗などはすっかり括弧に入れて無関係に生きることに決めてきたから、それらは謎だったし、いまだにそうであり続けている。

その謎にも大別して二つの系列があった。まずは、年に数回の法事と、正月とお盆の明節（僕らは方言で「メンジリ」と呼んだ）があった。これにはその昔には今と違って親族、知人などが多く集まったものだった。いまひとつの系列は、年に一度、石切のお寺から我が家にやってきて僕らを怯えさせた「どんどんの神さん」による終日の儀式（詳細は拙著『「在日」の言葉』参照のこと）、そして、母が一人で石切の朝鮮寺や桜ノ宮の竜王宮に赴いての儀式もあった。前者が儒教的伝統に則った男の世界であるのに対して、後者は、儒教的な世界からは迫害されたり取り残された民間の習俗、つまり「女」の世界である。但し、すっかり準備が整ってから男達がしゃしゃり出てきて儀式を執り行い、更には、酒を飲みながら大層な議論を展開した

あげくは喧嘩に至るといった男中心の儀式のように見える前者も含めて、実は両者共に、女性の力で成り立つばかりか、女性が生き生きと差配する世界として僕には強く印象づけられている。親族知人の女性たちが集まり、料理の準備にしみながら、情報を交換すると同時に日ごろの憂さを晴らしたり、一族郎党と知人などの生活共同体の結びつきを再確認してしばしの憩いを堪能する時空だった。

民族的伝統の伝承の砦などとしばしば顕揚されたりもする前者と異なり、後者の「女」の世界の系列についてはあまり言及もなさそうなので、記憶をまさぐりながらそのあたりについて少々。

その前日や当日になると、母は法事などの「男」の儀式の場合と同じく、いろいろと料理の準備に勤しむ。とりわけ大量のゆで卵があった。その大半を儀式の後で母が家に持ち帰り、珍しい大盤振る舞いがあったから、その記憶だけが強烈に残っていて、他の料理のことはあまり覚えていないし、そもそも母が一人で料理を大量に持ってどこかへ行き、そして帰ってくるだけで、僕らはその儀式の内容について知るべくもなかった。

とは言っても、僕は長じて後に、母を車に乗せて大川沿いまで幾度か行ったことがある。但し、その内容についてはいくつもバリエーションがある。

大川沿いの道路に母を降ろすことに関してはいつも同じなのだが、それが午後の早い時間だったこともあれば、薄暮れのことでもあれば、或いは、すっかり夜の帳が下りてからのこともあった。またその後の展開もまた、三つくらいのバージョンがある。1. 長時間待って母を乗せて家に帰る、或いは時間を見計らって迎えに戻る。2. 母は夜遅くに電車で、或いは友人の息子、嫁の車に便乗させてもらって帰ってくる。3. 僕も料理を抱えながら母に同行して、「クッ」の現場近くまで足を伸ばすのだが、その場合にもまた二種類のバージョンがあった。河川敷から10メートルばかり離れた小島と河川敷の川べりの両方に竿が立てられそれらが紐で結ばれている。川岸の竿を揺すぶると、小島の方の竿にも振動が伝わって小船が迎えにやってくる。母はその船に乗り込み、僕が抱えていた包みを受け取り、「もうええから、おまえは帰り」と言い残して向こう岸へ向かう。

もうひとつは、二人して荷物を抱えてそのまま徒歩で河川敷のバラック群の中へ。すると、その昔、我が家の近くにあった幾つかの朝鮮人集落の中でも際立って貧しくて鳥小屋とも呼ばれ、僕などは怖くて殆ど足を踏み入れたことがなかった集落がタイムスリップで蘇ったような感じ。その暗くてじめじめとした路地を恐る恐る進んで、バラックの一つに足を踏み入れる。すると、わいわいがやがやと賑やかな女性群が裸電球に照らされて薄暗がりから浮かび上がる。彼女らは一瞬口を閉じ、顔を上げて僕たちを見つめる。その中には僕が見知ったおばさんたちが幾人もいて、顔を崩してにこにこ「兄ちゃん、あんたも来たんか、えらいなあ」と口々に労いの言葉をかけてくれる。僕はあつけにとられて、照れ笑いをしながら、包みを置いて、そそくさと踝を返す。

因みに、母はその後、夜間中学に通いだすのだが、そのおばさんたちの多くがクラスメートにもなるし、そもそも、そのおばさんたちの誘いもあって、母は夜間中学に通い始めた。僕の母を含めて、文字が読めない一世の女性たちにとっては、こうしたネットワークで得られる口コミ情報は大層に言えば「ライフライン」或いは「セーフティネット」に近い役割りを果たしていた。上記の夜間中学ばかりか、息子や娘の縁談、家族の病気に苦しんでいる場合には医者や漢方薬の情報、お墓の話し、濟州島の財産にまつわる苦労話と解決策、亭主の女性問題、姑や嫁との諍いなどについての愚痴と解決策の披露、さらには……。

といったように、法事も含めてそうした場は、一世の女性たちにとってなくてはならない時

空であつた。だからこそ、それに積極的に関わる希な二世三世の嫁はよくできた嫁、そうでない場合は、「私の運命（ばるちゃ）や、それでも何であんたらの嫁さんはなんでそんなに「偉い」ねん」などと、頼りない息子への抗議や叱責や愚痴の種にもなる。

伝統や心情の砦のようなところにおいてこそ、さまざまな微妙な差異に基づく軋轢、争闘、そしてそれをも含めた人間の愛憎関係が生じ、それこそが現実ということなのだろう。そうした「現場」を改めて生き直し、その核を取り出したいと願っているのだが、それはいかんにして可能なのだろうか。



第265回朝鮮近現代史研究会 (2008.5.10)

朝鮮開港期における中国人労働者問題

- 広梁湾塩田築造工事の苦力を中心に - 李 正熙

本発表は朝鮮開港期における中国人労働者問題について平安南道広梁湾塩田築造工事に雇用されていた苦力の事例を通じて検討したものである。主に利用した史料は、台湾中央研究院近代史研究所所蔵の駐韓使館保存檔案の「広梁湾塩場各案」である。この史料は「宣統元年広梁湾塩場招工事」、「宣統二年広梁湾塩場招工事」、「宣統三年広梁湾塩場工人逃回事」の三部構成になっている。それぞれの史料は苦力の募集、待遇、逃走をめぐって清国総領事館及び鎮南浦領事館の対応、同総領事館と統監府とのやりとりを盛り込んだ公文書であり、朝鮮開港期在韓中国人労働者問題を解明する上で有効な史料である。

朝鮮開港期における在朝中国人に関する研究は主に中国人商人(華商)に主眼が置かれて研究がなされてきた。これらの諸研究は在朝華商が朝鮮の開港場において英国産綿織物、清国産の麻織物及び絹織物などを上海から直接輸入して在朝日本人商人のライバルとして存在していたことに注目し、その経済活動について朝鮮開港期華商を代表する同順泰を事例として取り上げ、同順泰が東アジアの各地域に張り巡らした通商ネットワーク及びその商業活動の解明を行った。

しかし、朝鮮開港期における在朝中国人は華商にとどまらず、労働者も多数居住していた。一九〇六～一九一〇年平均約四〇〇〇名の中国人労働者があって、労働者の人数は商業従事者をやや上回っていた。この結果から朝鮮開港期の在朝中国人に関する研究は華商だけでなく、労働者に関する研究も必要と考えられるが、それに関する研究は管見の限り皆無に等しい。

韓国政府度支部が広梁湾を天日塩田築造の候補地として選定した理由は清国産塩の輸入の多かった鎮南浦港から近いところにあった地理的条件、天日塩田築造及び天日製塩に適した自然的条件にあった。広梁湾塩田築造計画は一九〇九年から三か年間の継続事業として一〇〇〇町歩の塩田を築造して韓国消費食塩の三分の一を生産する巨大なプロジェクトで所要予算は一九〇九年度韓国総歳入(公債・借入金除外)の七.六%に達していた。

度支部は広梁湾塩田を官営することを決め、西山組と志岐組がそれぞれ一九〇九年と一九一〇年安価な賃金と塩田築造の経験ある苦力の募集を度支部から請け負った。西山組は一九〇九年八〇八名、志岐組は一九一〇年約三〇〇〇名を清国で募集して工事現場に使役した。これだけの苦力が「韓国併合」以前韓国の工事現場に雇用されていたことは今回初めて明らかにされたと考えられる。

しかし、同工事現場に雇用されていた苦力は待遇問題などによって相次いで逃走し、その問題解決のため統監府と清国総領事館との間に激しいやり取りが繰り広げられた。一九〇九年苦力問題の根源には苦力に一方的に不利な「苦力供給に関する契約書」にあって、清国総領事館

はその契約書の見直しを統監府に働きかけると同時に、鎮南浦領事館が保護する逃走苦力に対しては交通費及び旅費を出して早速送還することを強く求めた。それに対して統監府は同工事現場の苦力問題は西山組にあると主張して応じなかったが、清国総領事館が度支部及び西山組によって勝手に清国で苦力を募集した不法性を強硬に追及したこと、同工事現場の苦力問題が社会問題化したことを受けて、統監府は苦力の待遇改善、逃走苦力の送還を受け入れ、問題は解決された。

以上の検討を通じて、朝鮮開港期の在朝中国人研究にこれまでの華商一辺倒の検討に加えて苦力を含めた労働者に関する研究の必要性を提起できたと考える。

■第4回在日朝鮮人運動史研究会・日韓合同研究会ご案内■

日時：2009年7月24日（金）午後1時30分～25日（土）正午

会場：神戸学生青年センター TEL 078-851-2760

阪急六甲下車徒歩3分、JR六甲道下車徒歩10分

費用：参加費1000円（資料代込）

懇親会会費5000円（学生、韓国からの参加者は2500円）

宿泊：神戸学生青年センターで宿泊できます。（2900円、相部屋）

主催：在日朝鮮人運動史研究会関西部会（代表・飛田雄一）

在日朝鮮人運動史研究会関東部会（代表・樋口雄一）

韓国民族問題学会（代表・崔永鎬）

■7月23日（木）ワークショップ『不逞社（金子文子・朴烈たち）の時代から東アジアの未来・平和の自由共同体に向けて』（神戸学生青年センター、18:30～）が開かれます。主催・神戸学生青年センター・韓国・自由共同体研究会（内容に関する問合せ futei@jcom.home.ne.jp 03-5317-5988 昼のみ 亀田博）

■強制動員真相究明ネットワーク／強制動員真相究明全国研究集会―「名簿」「供託金」問題と中心として―／7月25日（土）午後2時～26日（日）午後5時／神戸学生青年センター

●青丘文庫研究会のご案内●

■第313回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

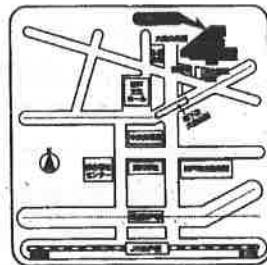
7月12日（日）午後3時～5時

日本共産党「50年分裂」と在日朝鮮人―広島事例―

黒川伊織

■朝鮮近現代史研究会はお休みです

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

8月はお休みです。9月13日（日）、在日・近現代史（未定）、10月11日（未定）、11月8日（日）在日（砂上昌一）。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセーの予定】

9月号以降は、松田利彦、三宅美千子、吉川絢子、李景珉。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。